愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第36巻　1～10　1990

対人関係の研究(2)

――人格の対人的次元について――

戸苅正人
(教育心理学研究室)
(平成元年10月11日受理)

I　はじめに

Leary, et al. による人格の対人的診断法 (Interpersonal diagnosis of personality) は，本来，1)心理療法に先立つ，クライエントの人格構造の組織的な見方の樹立と，2)治療による変化の予見および，3)治療中と治療後の人格構造変化の測定を目的とした，共同研究の成果である。(文献6) この診断体系は，本来，臨床的目的のために開発されたものであるが，広く人格の研究と理解にとっても，寄与するところが少なくない。

かつて筆者は，この対人的診断法の概略を紹介したことがある。[16] その小論の後記に次のように記している。"……科学としての客観的手続の点でも，その組織的，包括的な診断法の樹立の点でも，単に臨床家のみならず，研究者にとっても示唆するところ大であろう。特に multilevel アプローチは，画期的というべきであろう。もはやパーソナリティの一面的研究は跡を断たねばならない (1957, 12)" と。遺憾ながらこの主張は，20世紀末の今日においてもなお，新鮮にきこえる現状である。

その後，30余年にわたり，筆者は，この診断法の理論的，実践的検討を続けてきた。[17] その過程において，この診断法に内在するいくつかの問題点を発見し，その改訂に努めてきた。その第一は，対人的診断法のよって立つ人格理論の根拠の問題点である。Leary, et al. の人格の対人的診断の体系は，主として Sullivan, H. S. の対人関係理論[10,12] にもとづき，またそれを発展させたものといわれる。[6] しかし，人間行動のうち，特に対人的次元に集中する根拠には，Sullivan の強調した科学の方法論的前提の考慮が欠けている。また，Sullivan, Leary et al. ともに，対人的次元の重視に当たって，その経験的，心理学的基礎は考慮しているが，人間存在の実存的，人間学的基礎についての考慮に欠けている。さらに，両者とも，対人関係の重要な相手としての《自己自身》についての考慮が欠落している。

今回は，この3点についての考察と補完の試みを中心にして報告する。

II　人格の対人的次元について

Leary, et al. の人格の対人的診断法の第一の特色は，Sullivan の対人関係理論にもとづき，人格の対人的次元 (interpersonal dimension) に注目した点にある。Sullivan は，精神医学を「対人関係の研究」と規定したことで知られているが，[10] 精神医学の分野に《対人関係 (interpersonal

relations)》なるタームを導入した最初の人でもある。

今日では，対人関係なるタームは，人間関係と殆ど同義に用いられるほど多用されているが，Sullivan のいう対人関係の本来の意味は，《人間相互間の関係》，すなわち，個人の他の人間との相互作用を意味する。しかも，その相互作用の相手は，現実の人間にかぎられない。他者の観念や空想上の他者も含まれる。さらに，個人にかぎらず，集団や社会規範，道徳的価値の如く擬人化された対象や他者の象徴をも含む。それのみではなく，理想や良心の如く，個人の内なる象徴的他者まで含まれる。したがって，現実の他者や集団とのあらわな交渉のみではなく，観念上や空想上の他者との交渉や，他者の象徴との内面的なかくれた交渉もまた対人関係である。[6]

なお，社会心理学の分野においては，Heider, F.[5] や Tagiuri, R.[14] らの研究に刺激されて，“対人行動”の研究が盛んになったが，それらは対人認知，対人態度の研究の如く，他者に対する一方的な認知や態度の研究であり，人間の相互関係の研究は少ない。ことばの本来の意味での “interpersonal” ではない。また相互関係の研究も，“現実の” 他者にかぎられており，Sullivan のいう意味での対人関係の研究とは異なる。

1　対人的コミュニケーションの研究

筆者は，かつて，Leary, et al. の対人的診断法の紹介にあたって，次のようにまとめたことがある。“人格（パーソナリティ）の最も重要な次元は，対人的次元である。その理由の第一は，科学の方法論的前提に関するもの。第二は，人間の生存にとっての対人行動の決定的重要性に関するもの。第三は，もっとせまい見地からみて，臨床的予見にとっての対人行動の機能的重要性に関するものである。この故に，われわれは，広範囲にわたる人間行動のかぎられた一次元，すなわち《対人的次元》に集中する” と。[16] ここでは先ず第一に，科学の方法論的前提について考察する。

① 公共的客観性

“科学的研究にとっては，純粋にプライベートなものはデータとすることはできない。科学のデータは，公共的なものか，公共的なものに変換しうるものでなければならない”。[12] 人が何を考え，何を求め，何を空想しようと，その経験自体は，プライベートな個人的経験であり，第三者には知る由もない。それを科学の材料とするためには，その経験が何らかの形で，第三者に伝えられなければならない。すなわち，共通の言語か記号によって報告された時，はじめて公共的なデータとなるのである。

“AはBを侮辱した”。“私は親切だ”。“大統領になった夢をみた”。これは，一人の人の対人行動を，三つの異なった観察のレベル（第三者の報告，自己報告，夢の報告）にわたって記述した《ことば》である。これが人格の基本的データである。

それ故，われわれの研究するのは，実際の行動そのものではなく，他人の行動についての観察（経験）を伝達する《ことば》である。すなわち，人格の基本的データは，対人行動についての当人自身か，第三者によるコミュニケーションである。

② 仮説的概念としての人格

人格というのは，個人の行動を説明するために設けた仮説的概念である。直接に観察される実体ではなく，観察される行動から推論しうるのみである。そうとすれば，《人》というのは，人格としてしかとらえられない。なぜならば，〈真にその人〉とか，〈その人自身〉は，第三者には知りえない。人を知るとは，観察可能な行動を通してしかありえない。したがって人の人格を知る

道は，その人が直接にしろ，間接にしろ，他人に伝達するもの以外にはない。すなわち，その人の他の人に対する関係（コミュニケーション）以外にはないのである。

それ故，人格は，対人関係のタームでしか理解しえないことになる。

③　対人場面の研究

人格の科学の研究対象は，〈孤立した自己充足的な実体としての個人〉ではなく，二人またはそれ以上の人びとによって統合された《対人場面＝事態 (interpersonal situations)》である。[10,11] 〈あれこれの傾向，欲求をあらわす孤立した人〉を語るのは正確でもないし，科学的でもない。なぜならば，われわれは，傾向とか欲求そのものを直接に観察することはできないからである。われわれが観察しうるのは，一つの対人場面（二人またはそれ以上の人びとによって統合された一つの場面）と，その場面の統合作用の性格を物語る行為のみである。[10,11]

対人場面とは，空間的ではなく，二人またはそれ以上の人びとの間の統合された相互作用である。[10,11] ところで，二人の人が相互的にその場を構成しているのであるから，二人の相互作用のパターンが，その場面を定義する。その人の何たるかは，その人の統合している対人場面の特性によって記述される。[10,11] そこである傾向なり欲求をもつというのは，ある種の対人場面を統合しやすいことをいう。敵対的な人とは，チャンスがあれば，敵対的な場面を統合する人をいう。愛情のある人とは，愛という特徴をもった対人場面を統合する人をいう。一般的にいえば，人格とは，人が現実の人であれ，空想上の人物であれ，他人と統合する対人場面の種類の関数である。[10,11]

それ故，人格の科学は，必然的に対人関係の研究に他ならないのである。

④　対人的コミュニケーションの研究

“精神医学は，対人関係――人と人の間に進行する諸過程――の研究である。”[10] Sullivan の最も劇的な業績は，この主張を実証したことにある。第二の業績は，他の個人と客観的に接触するための観察方法と態度（関与しながらの観察）[10,12,13] を導入したことである。

われわれは，超然とした観察者として，対人場面を研究し，記述するのではない。実際には，われわれもまた，その場面の構成要素になっているのである。どんな二人の間の関係においても，双方とも分離した実体としてではなく，一つの対人場面の一部分として含まれ，その場に影響を与えると同時に，その場によって影響を受けるのである。[12] したがって，われわれは，関与しながらの観察者 (participant observer) になる。見る者と見られる者との間に進行する現象を，見る者が見られる者に関与することにより創り出された場面において，研究するのである。

このように，観察を，《関与しながらの観察》として自覚する時に，はじめて他の個人の科学的観察が可能になるのである。観察の本性が上記の如きものとすれば，人格の科学は，必然的に対人的コミュニケーションの研究に他ならない。人格の科学のデータは，基本的には，対人場面の関与しながらの観察によってえられることになる。

2　対人行動と人間の生存

Leary, et al. は，Sullivan の他に，Horney, K., Fromm, E., Erikson, E. H. の人格理論を検討の結果，対人的次元を人格の最も決定的かつ，機能的に重要な次元とする結論に達している。その理由の第一として，より広い理論的準拠標からみて，対人行動は人間の生存にとって決定的なものであること，第二として，より狭い観点からみて，臨床家にとって対人行動が最も機能的に重要な人格の次元であること，を挙げている。[6] しかし，第一点については簡略にしか述べていな

い。そこで，第一の理由について，Sullivan を援用しながら，考察することにする。

① 出生時の生物学的無力さと他者への依存

人間とその他の動物とを区別する主要な差異の一つは，人間の乳児期の無力さと，成長のために長い期間を要することである。多くの動物は，出生後間もなく独り立ちをする。移動，食物の選択，自己防禦の方法も，遺伝によって直接に受継いでいる。ところが人間の場合は全く異なる。生存のために必要なものすべて（水，乳，暖かさなど）は，他の人間によって与えられるのであり，危険の回避も他の人間の世話に頼らざるをえない。したがって最初の《生存上の不安》は，対人的反応によって処理されるのである。

したがって出生の瞬間から，乳児の生存は mothering-one（母親役をしてくれる人）の対人的反応の適切さにかかっているのである。また，長い成長期間中は，生存のためにも，情緒的安定のためにも，他の人間に依存しなければならないのである。[12)]

子どもが成長しても，対人関係の重要性はそれほど変わらない。7歳にもなれば，相当に自立できるとしても，子どもが一人だけで生きられるとは想像もつかない。ロビンソン・クルーソーでさえ，フライデーを連れていた。もし彼がいなければ，おそらく気が狂ったであろう。他人への身体的依存は卒業したとしても，情緒的依存がなくては，一日たりとも生きてはいけないであろう。

② 文化的条件づけ：対人的学習

人間は，長期にわたる親（親代理）の保護のおかげで，生存を保てるのであり，その間に，人間としての生存に必要な文化的知恵を学習するのである。人間は生物学的無力さと本能的規定性の弱さの故に，それに代わるものとして文化を創造する。人間は文化の世界との Communal existence (共存) なくしては，生きることも，《人間》たることも不可能である。[10,12)] 人間動物が《人間》となるのは，文化的条件づけ，すなわち対人的学習の結果である。文化が，個人の中に確立されてゆくのは，他の人間との相互作用の結果である。

したがって，文化の世界との communal existence を必要とするとは，人間は人間としての生存のためには，他の人間との対人関係を必要とすることを意味する。[12)]

③ 対人的欲求の獲得

乳児が，生存のためには他人の協力を必要とすることから，自分の生活における《重要な他者 (significant others)》[10,11)] の優しい協力 (tenderness) を求める欲求，他者との接触を求める欲求を獲得するにいたる。[12)] これは，やがて“愛”と呼ばれる“他人との親交を求める欲求”に発達するものである。[12)] この欲求の基礎にあるのは，孤独（他人からの分離，孤立）の恐怖である。

他方，《満足の追求 (pursuit of satisfaction)》——生物学的欲求の充足——に，しつけによる文化的条件づけが加えられることから，重要な他者の是認を求め，否認を避けようとする特異に強力な対人的欲求を獲得するにいたる。これをSullivan は，《安全の追求 (pursuit of security)》と呼んだ。[10)] これは，不安の回避，または自尊心 (self esteem)，個人的重要性の感情 (personal worth) の獲得と維持をめざすものであり，その動機となるのは，《不安》とよばれる緊張である。不安は生涯の早期からの対人経験の所産であり，いかなる対人場面にも関与する。[12)]

Sullivan は不安を対人的現象とみている。不安が対人的現象であるのは，それが他人および自己自身による毀損と拒否のおそろしい予感だからである。

④ 人格発達と対人関係

Leary et al. によれば，現実の，または空想上の他の人間に，公然と，意識的に，または象徴

的に関係する活動は，すべて interpersonal である。[6]

この対人行動が基本的生存機能をもっている。不安，すなわち対人的破滅の恐れは，破壊または放棄の恐れにもとづいている。人類の相互依存性のために，《重要な他者》に非難され，拒否されることは，破壊または放棄されることを意味する。そこから不安に対抗するための《安全工作(security operations)》が組織されてゆく。対人行動は，この是認と安全を保証する安全工作と見做される。[12]

人間の人格（パーソナリティ）の発達における不安の役割は中心的である。発生的には死の恐怖に発しているとはいえ，不安，すなわち self esteem 喪失の恐れは，成人の場合には死の恐怖よりも強い。それに応じて，不安に対抗して組織される安全工作も複雑を極めている。Sullivan によれば，対人行動は，あらわな行為のみならず，プライベートな知覚，意識的報告，象徴的表現や知らぬ間の表現をも含むという。それ故，個人の対人行動は，多くのレベルにわたって不安を防ぎ，自尊心を守り，高めるための安全工作とみることができる。

Sullivan は，人格発達の原動力を不安にあるとみた。人格は不安を契機として，不安に対する対抗策の組織として発達するというのである。かくして，Sullivan は，人格を定義する。《一人の人間の生活を特徴づける，周期的に繰り返す対人場面の比較的永続的なパターンである》と。[10,12]

⑤　対人関係と人格

Sullivan の対人的志向にもとづき，Leary, et al. は，人格の最も重要な次元として対人行動に注目し，パーソナリティの科学を〈対人関係の研究〉と規定し，人格を《個人の表わす対人的反応の multilevel のパターンである》と定義している。[6]

このような見地からすれば，一人の人を理解するということは，彼が不安を回避し，または自尊心を守り高めるために，どんな対人的テクニックを用いるか，また，これらのテクニックの結果として統合する一貫した対人関係のパターンを知ることである。

以上を要約すれば，人間は，生物学的生存のためのみか，人間となるための学習にも対人関係を必要とするが，この学習は，また一人ひとりの人格をつくるプロセスでもある。したがって，対人関係，不安，人格は三位一体の関係にあることになる。

さらに，成熟の時に当たっても，人の生存は，成功的な対人関係にかかっている。“自殺”とか“隠者”の生活のようなケースでさえ例外ではない。“生を断つ”，“世を捨てる”という適応のテクニックは，〈他者からの退却〉を意味し，それ自体，一つの対人的反応である。したがって，個人の幸福と不幸，成功と失敗は，人がどのように他者とかかわってゆくか，その人の対人関係のあり方にかかっているのである。

最後に，Sullivan の経験主義的，実証的な傾向は，臨床家としての彼のメリットでもあれば，ディメリットでもあったといえよう。人間についての経験的，心理学的基礎は提供したが，実存的，人間学的基礎についての考慮は欠如している。

3　人間存在の実存的，人間学的基礎

①　世界の三様態

Binswanger, L. によれば，Heidegger の功績は，人間存在の基礎的構造を解明し，それを《世界内存在 (In-der-Welt-Sein)》としてとらえたところにあるという。[1] 人間は世界の中にありながら，しかもこの世界にかかわってゆく存在，みずからを投企してゆく存在であるというのである。

同じく現象学派の社会心理学者，Maisonneuve も，人間存在の本質を《かかわってあること》にあるとしている。[7] しかし，人は人間一般として存在するのではなく，《実存》，すなわち特殊な状況における具体的な個人として存在する。では，実存が，その中にあり，それに対してかかわってゆく世界とはどんな世界か？

May, R. によれば，現存在分析家は，世界の三つの様態（モード）を区別するという。[9] 第一に環界 (Umwelt) がある。文字通りには，まわりの世界を意味する。生物学的世界であり，一般に環境とよばれる。第二に，ともにある世界 (Mitwelt) がある。文字通り共にもつ世界（共同世界）であり，自分の仲間の人びとの世界である。第三は独自の世界 (Eigenwelt)，自己自身の世界，自己との関係の様態である。

第一の《環界》は，事物の世界，自然の世界である。第二の《ともにある世界》は，人びとの相互関係の世界である。第三の《独自の世界》は，自己意識，自己関係性を前提としており，人間において独自的に存在している。それは単に主観的な内的体験ではなく，それにもとづいて現実の世界を真の展望のうちに見るものであり，それにもとづいて関係をもつ基盤なのである。人間存在は，同時に，環界，共有世界，独自の世界の中に生きている。この三つは三種の異なる世界ではなく世界―内―存在の三つの同時生起的な様態である。[9]

したがって，世界―内―存在とは，人が，ものや他人や自己自身との〈かかわりにおいてある〉ことを意味する。しかし，人間存在のより基本的なあり方は，ものとのかかわりにあるよりは，〈人との相互関係の中に〉ある。さらに，一人の人の全体としての存在の仕方を特徴づけているのは，その人の《自己自身へのかかわり方》であるといわれる。[15]

② 自己自身とのかかわり

Binswanger は，Freud の80歳の誕生日祝賀講演において，“Freud の偉大な貢献は，自然人，すなわち自然（環境 Umwelt）との関係における人間の領域においてであった。Freud の理論には，自分の仲間（共同世界）との関係における人間の影のような，附加現象的な理解があるだけで，自己自身との関係における人間の領域（自己世界）は，まったく無視されている”と述べている。[1,8]

それに対して，Sullivan の対人関係理論は，共有世界を扱うための理論的基礎をもっていると May はいう。“共同世界と対人関係理論とは，非常に多くの共通点をもっているが，もし，独自の世界（自己世界）が欠落しているならば，対人関係は空虚で不毛になる傾向がある”と。[9]

Sullivan が，全くプライベートなものは，科学の対象になしえないとして，個人の個性を否定したのは周知のことである。[10] そのために，“反映された評価 (reflected appraisal)” および社会的カテゴリー，つまり個人が対人的世界において演じる役割に即して，“自己”を定義づけるために多大の努力を払った。その結果は，実際には，自己を周囲の集団の鏡とみなし，自己の生命力と独創性を空虚にし，対人的世界を単なる“社会的関係”に還元している傾向があるとの批判を受けるにいたったのである。[9]

Binswanger の Freud 批判にならっていうならば，Sullivan の理論には，自分の仲間（共同世界）との関係における人間の理解はあるが，自己自身との関係における人間の領域（自己世界）は無視されている。

しかし，個性の否定は Sullivan の誤りである。人は一人ひとりユニークな内的世界をもっている。それがその人の行動を規定し色づけているのである。また，科学の対象を，直接観察可能なものにかぎるのも偏狭といわざるをえない。ここには，Sullivan の思考に混乱がみられる。

Sullivan の〈ことば〉を文字通りにとれば，彼の理論には，《自己世界》が欠落しており，した

がって彼のいう対人関係には，《自己自身とのかかわり（われ―自己関係）》が考慮されていない。

同じネオ・フロイディアンの中でも，Fromm, E. は，現存在分析家の考えと一致し，人がかかわる世界として，事物世界，人間関係の世界のほかに，自己自身の世界を考慮していた。“人生の過程において，人は世界と次のような仕方で関係をもつ。1)事物を獲得したり，同化したりすることによって，2)自分を他の人びと（および自己自身）と関係させることによってである”と[4]。

因みに，筆者の人格の定義は，Sullivan よりも Fromm のそれに近い。人格を他者と自己とにかかわる態度の次元でとらえ，対人関係の構え（内面的姿勢）と定義する。

ところで，Sullivan の〈ことば〉ではなく，〈していること〉に注目すれば，彼のいう人格には，〈自己組織〉とその複数化した〈私―あなたパターン〉のみならず，〈選択的非注意により意識の枠外にあるもの〉，〈自己から解離されたもの〉をも包含する。[10] これらは，実は《自己世界》に属するものではないか。《自己世界》とは，主体としての人間が，自分自身の内奥とかかわる内的世界である。この内的世界そのものは私的な世界であり，外から直接には見えないが，それを知る方法はある。それは現象学的方法である。人の内的世界をリアルに理解するには，その人と直接に対話をすることである。この直接的なコミュニケーションを通して，その人の内的世界がヴィヴィッドにあらわされてくるのである。[15]

③　われ―なんじの関係

谷口によれば，人間は生物体としての次元を含み，社会的・文化的次元を含み，究極的には，存在の次元においてあるものであるという。“自己自身に対する真のかかわり方とは，自己が《存在としての自己》を真に実現できるように，自己自身に対して配慮することである。この存在の次元における自己体験において，人ははじめて，ものに対しても，他人に対しても正しくかかわることができるようになるのである”。[15]

Sullivan，したがって Leary et al. においては，《自己世界》が欠落しており，自己自身との関係が考慮されていないことは先に見た。自己世界の欠落は，存在としての自己の次元の考慮の欠如を意味する。

また，人の自己自身に対する真のかかわり方が姿を消し，そのかかわり方に変様が生じる時，ものや他人に対するかかわり方にも変様が生じる。共生的関係，退行的関係，利害的関係というような，人間関係における原理的な変様は，すべて《存在としての自己》が覆いかくされている時の関係の変様にほかならない。そこには，依存や孤立や利用という関係の仕方があらわれ，支配とか服従とか，破壊とか不信とか，また人間のもの化というような現象が生じるといわれる。[15]

Leary, et al. の分類した対人的変数は，まさにこのような，《存在としての自己》からの逃避の結果として生じる，人間存在の変様の諸相をとらえているにすぎないのではないか。

最後に，“人間関係の本来性は，それが対話的関係にあるということにある。対話的関係とは，人がその全存在をあげて相互的に関係しあう関係の仕方である。それは，鮮明な存在感覚と，存在としての他者に対する鋭敏な感受性にもとづいた，存在と存在との出会いとして，はじめて成立する”といわれる。[15]

この対話的関係とは，Buber, M. のいう“われとなんじ”の人格的関係に相当する。[3] しかし，Sullivan と Leary et al. のいう対人関係には，“われとなんじ”の関係は，十分に考慮されてはいない。本来，《共同世界》が，“われ―なんじ”の関係として開かれるためには，《自己世界》が，すでに開かれていることが必要である。[15] ところが，Sullivan と Leary et al. にあっては，《自己世界》が欠落している。そこでの対人関係は，医師と患者の関係の如き不平等な役割関係か，日常的な利害関係や“われ―それ”の非人格的な関係にとどまることになる。したがって，そこには

日常性に顕落した対人関係はあっても，実存哲学者の強調する《出会い（Begnung)》の体験は生じにくいであろう。

ただし，Boss, M. が Freud について指摘したような，理論と臨床実践との乖離[2]が，Sullivan の場合にもあるのかもしれない。

以上の考察のように，Sullivan の対人関係理論，それにもとづく Leary et al. の人格の対人的診断法には，《自己世界》が欠落している。したがって自己自身とのかかわりが考慮されていない。さらに，存在としての自己の次元が考慮されていないため，“われとなんじ”の関係は生じにくい。これらの欠落は，現存在分析家のいう《自己世界》の復権によって補完する必要があろう。ただし，自己自身との関係および存在の次元を，人格診断の実際においてどのようにとらえるべきか，それは次回の問題である。

なお，現存在分析でいう世界は，現実の世界ではなく，自己の投影，自己の分身であり，客観的世界ではないという Frankl の Binswanger 批判は承知しているが，人間のかかわる世界の考慮のために，Binswanger の《世界》の概念を援用したにとどまる。

III　非対人的次元について

1　非対人的志向

筆者は，人格の最も重要な次元は，《対人的次元》であると考えている。しかし，人格の次元を対人的次元に集中することに対しては，批判もある。人間の行動のすべてが“対人的”とはかぎらない。非対人的ではあっても重要な次元があるというのである。この批判は，従来の心理学の立場からすれば，尤もな批判と思われる。

従来の心理学は，人間を孤立させ，生物学的個体として扱ってきた。そこでは，知能，興味，気質，素質的性格，適性，知覚，学習思考，反応時間などが，主題とされていた。それは，人間を，他者との相互作用の中にある社会的存在としてはとらえず，環境から孤立した生物学的個体として，静止的，固定的にしかみないので，伝統的に，行動の“非対人的”側面にのみ関心していたのである。この傾向は，精神医学や“性格”心理学の分野においても同様であった。

今から45年ほど前までは，精神医学や“性格”心理学の文献は，人間の非社会的，生物学的側面を中心にした概念で充たされていた。精神病の遺伝的基礎，精神病質の分類，体格と性格，外向性—内向性といった素質的類型など。人間を，他者との相互作用の中にある個人としてはとらえていなかったのである。

2　対人的志向の誕生

しかし，人間本性についての研究は，今世紀の半ばごろから，環境から孤立した生物学的個体としての〈個人〉の強調から，〈他者との関係における個人〉の強調に転じ始めた。

精神医学の主題は，事例史や症候の分類から離れて，個人間の社会的交互作用や，文化的条件の分析にすすんだ。文化とパーソナリティ，親子関係，家族内力動，集団内地位，出生順位など。そこから，情緒問題や精神疾患を，“生きることの難しさ”と規定し，生きることの難しさは，対

人関係の障害によるとみる新しい精神医学が生まれた(Sullivan)。

その結果，今日では理論的関心は，以前とは異なった方向をとっている。人間は独自に社会的存在であり，つねに家族や同時代の人びと，先の時代の人びと，社会との決定的相互作用の中にあるとみられている。

この新しい方向を，《人格の対人関係理論》という。これは，コミュニケーション理論，文化人類学，新しい精神分析学(Fromm, Horney, Sullivan, Erikson)などの発達によるものである。対人関係理論（対人的アプローチ）は，現代のいくつかの理論の輻輳の産物であり，精神医学，心理学，文化人類学，社会学などの交流によるものである。[6]

3　対人的見地からの再検討

①　非対人的行動の対人的意味

ところが，精神医学や心理学には，今なお，〈非対人的〉諸概念が残存している。たとえば，人（性）格特性記述用語をみてみよう。〈抑うつ的〉，〈精力的〉，〈衝動的〉，〈神経質〉……。これらのタームは，それ自体では，それほど意味をもたない。それの対人的意図（目的）をつけ加える時に，はじめてその意味が明らかになる。

たとえば，“彼はのんき者だ”，“私は憂うつだ”，“鳩になった夢をみた”。この三つの陳述は，観察の三つのレベルからえた情報である。これら三つの報告は，直接には〈他人との関係〉に触れてはいない。しかし，もっとつっこんでみれば，“のん気”に振舞うのはなぜか？　それは，自分はこせこせしない大らかな人間として，〈他人に見せようとしている〉からかもしれない。“憂うつだ”との訴えは，〈人の同情を引くため〉かもしれない。“鳩の夢をみた”のは，〈愛情や優しさ〉を意味しているのかもしれない。このように見れば，一見，“対人的”とは見えない個人的特性も，社会的意味をもつものになり，個人の《他の人間との関係》を反映するものになる。[6]

一つの行動の意味は，それだけを孤立させて見ては，不明である。その行動が，一体何をめざしているのか，相手に対して何を訴えているのか，相手から何を引出そうとしているのか，という《対人的意図》に注目する時に，はじめて明らかになるのである。対人的文脈を背景にして，それぞれの行動を見ることが必要とされる。

②　人格診断（理解）への含み

従来の非対人的見地によれば，面接や検査の結果にもとづいて，“不安が高い”，“協調性が高い”とか判断するであろう。しかし，不安が高い，協調性が高いといっても，それだけでは大した価値はない。面接者，検査者に対して，〈同情を引くために〉とか，〈自分をよく見せるために〉，という対人的意図をつけ加えた時に，はじめて意味深いものになるのである。それ故，質問や検査に対する反応を，臨床家に対する反応として，すなわち《対人行動》として扱うことが必要になる。

このように，対人的アプローチをとる研究者や臨床家は，相手の行為の社会的含みに注意する。相手の報告や行為を，それ自体としてではなく，自分に対する《対人的圧力，メッセージ》として見るのである。相手の人は私に何を訴えようとしているのか，私から，どんな反応を引出そうとしているのかと。

したがって，対人的見地からすれば，面接や検査によって，クライエントの知能や態度を診断するのではなく，クライエントが，その時間中に，臨床家に対して〈実行した対人的工作〉を中

心にした診断をすることになる[6]。対人的文脈を抜きにして，“賢い”とか，“依頼心が強い”とかいうのは無意味である。そうではなく，〈賢そうに振舞い，頭がよいと印象づけようとしている〉，〈何も知らず，何事も教えてもらわなくてはできない者として，頼りなげに振舞う〉，という点に注目するのである。同時に，相手の反応は，自分と相手とでつくりあげている対人場面の関数であり，相手の反応の決定には，研究者または臨床家も一役買っていること，このことの自覚が必要とされる。

最後に一言しておきたい。筆者は，体格，容貌，素質的性格など，非対人的次元を否定するわけではないが，これらの非対人的次元の特性も，対人的文脈に照らして見る時に，はじめてその行動（特性）の意味が明らかになるという事情からも，人格の対人的次元に関心するわけである。

後　記

漸くにして，永年の検討の一部をまとめることができた。文献は，単行本のみに限られたが，邦訳のあるものは，原則として訳書によった。引用頁数は，煩瑣になるので省略した。最後に，II－3については，谷口他「人間存在の心理学」に学ぶところが多い。同書は，人間科学としての心理学を志向する者にとっては，最適のガイドブックとして推奨する。付記して謝辞に代えたい。　(1989. 10)

文　献

1. Binswanger, L. Ausgewälte Vorträge Und Aussätze, Band I Zur phenomenologishen Antropologie, Francke Verlag, Bern, 1947.（荻野恒一他訳『現象学的人間学』，みすゞ書房，1967.）
2. Boss, M. Psychoanalyse und Daseinsanalitik, Hans Huber, Bern, 1957.（笠原嘉他訳『精神分析と現存在分析論』，みすゞ書房，1967.）
3. Buber, M. Ich und Du, Inselverlag, Leipzig, 1923.（野口啓祐訳『孤独と愛』，創文社，1958.）
4. Fromm, E. Man for himself, Rinehart, N. Y., 1947.（谷口隆之助他訳『人間における自由』，東京創元社，1972，改訳版）
5. Heider, F. The psychology of interpersonal behavior, Wiley, N. Y., 1958.
6. Leary, T. (ed) Interpersonal diagnosis of personality, Ronald Pr. N. Y., 1957.
7. Maisonneuve, J. Psychologie sociale, Collection Que sai-je No. 454.（内藤莞爾訳『社会心理』，クセジュ文庫，白水社，1957.）
8. May, R. (ed) Existential psychology, Random House, N. Y., 1961.（佐藤幸治訳『実存心理入門』，誠信書房，1966.）
9. May, R. et al. (eds) Existence : A new dimension in psychiatry and psychology, Basic Books, N. Y. ,1958.（伊東博他訳『実存一心理学と精神医学の新しい視点』，岩崎学術出版社，1977.）
10. Sullivan, H. S. Conceptions of modern psychiatry, The William Alanson White Publication Foundation, N. Y., 1947.（中井久夫他訳『現代精神医学の概念』，みすゞ書房，1976.）
11. Sullivan, H. S. Conceptions of modern psychiatry, Norton, N. Y., 1953.
12. Sullivan, H. S. The interpersonal theory of psychiatry, 2nd ed., Norton, N. Y., 1953.
13. Sullivan, H. S. The psychiatric interview, Norton, N. Y., 1954.
14. Tagiuri, R. and Petrullo, L. (eds) Person perception and interpersonal behavior, Stanford Univ. Pr., Stanford, 1958.
15. 谷口隆之助他『人間存在の心理学』，川島書店，1967.
16. 戸苅正人　臨床心理学における診断の問題II―パースナリティの対人的診断―，愛媛大学紀要，第5部，教育科学，第4巻，21-34，1957.
17. 戸苅正人　対人関係の研究(1)―ICL性格評定票の作成―，愛媛大学教育学部紀要，第1部，教育科学，第23巻，41-56，1977.